

江戸時代における国際化



Yuko Tanaka

法政大学総長
田中優子

たなか・ゆうこ
法政大学社会学部教授、国際日本学インスティテュート(大学院)教授。社会学部長を経て、2014年度より総長。専門は日本近世文化・アジア比較文化。研究領域は、江戸時代の文学、美術、生活文化。『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞、『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞・サントリー学芸賞を受賞。2005年度紫綬褒章受章。

日本はどの時代にあっても、海を媒介にした他国との交流なしには存在し得なかった。今後も同様である。日本一国が

他国を支配しようとする拡大主義は、常に失敗してきた。今後はなおさら、覇権が効き目を持たない世界になる。外交、

交流、共存の方法を洗練させるしか、日本が存続する道はない。

日本には幾つかのグローバリゼーションの波があった。古代から海を媒介に成立し育った国であるから、大陸との関係の中で生きてきたのはもちろんで

あるが、世界が地球規模でつながったのは大航海時代によってである。具体的には、スペインのガレオン船が太平洋を渡った1565年あたりからであろう。1571年にはマニラが建設され、年間約20万キロの銀が中国へ運ばれ始めた。その頃、東シナ海では中国人が大半を占める後期倭寇が私貿易で活動していたが、この時期、倭寇は完全に消滅する。何かが大きく変わった。

一時期は世界最大の銀産出国であった日本の銀は、しばらくアメリカ銀と共存するが、次第に後退し始める。アメリカ大陸経営とそのアジアへの影響を、私は

第1回目のグローバリゼーションであると考えている。もっとも大きくその影響を受けたのは、植民地化されたフィリピンやインドと、そして日本であった。

日本は秀吉の時代、土地の拡大という従来の方法によって、新しい事態を乗り越えようとした。中国、フィリピン、インドを手に入れることで、グローバリゼーションに対応しようとし、そして朝鮮王国と東アジア体制への読みを間違えて2度も敗戦する。日本は経済力もあり、多くの鉄砲を用意する技術力もあったのだから、敗退の原因は世界情勢、特に東アジアへの無知と、時代遅れの対応だったのではないかと思う。

江戸時代は、戦国時代の否定によって構築された。グローバリゼーションへの対応を、戦争によってではなく、ものづくりと流通と教育と外交によって成し遂げたのだ。最も早くおこなったのは、朝鮮王国との国交回復である。この国交回復は、日本人が拉致した人々を朝鮮に送

還することから始まった。中国と太いパイプを持つ琉球王国とも、脅迫的な形をとりはしたが、外交関係をより上げた。キリスト教と植民地主義をとるスペイン、ポルトガルとの国交を閉じ、株式会社であるオランダ東インド会社の支社を長崎に置くことで、世界諸地域との流通手段を確保した。彼らにはそれぞれ、江戸城まで旅をしてもらうことにした。その結果、江戸時代は、庶民が初めて、さまざまな外国人と接触する時代になったのである。この江戸登城という制度は、そもそも内戦回避のための参勤交代制度として整えられたのだが、外交にも応用された。

江戸時代を特徴付けるものは国内での外交の仕組みだけではない。海外から積極的に、しかし需要に満たない程度の技術産品を輸入することで、国内の技術向上と生産および流通を促したことである。全国の城下町から農村まで職人が急増し、中国由来の絹織物や磁器、インド由

来の綿織物、欧州由来のガラスやビロード、時計やレンズまで国内で生産するようになった。綿花栽培と生糸技術は向上し、書籍や絵図の印刷技術は革新された。江戸時代はグローバリゼーションに対して、技術向上と流通革命で応えたのである。

明治維新は第2回目のグローバリゼーション、敗戦時は第3回目のグローバリゼーションと言えらるだろう。それぞれヨーロッパに準拠した時代と、アメリカに準拠した時代である。そして今や、第4回目のグローバリゼーションが始まっている。今までどおりのアメリカ準拠型でいいのだろうか？ 秀吉のような時代遅れの覇権主義の失敗を繰り返すのではないか？ 日本列島に多くの外国人が暮らし、日本人が世界中を動くようになる。この混在型、流動型グローバリゼーションの到来に備え、江戸時代が実現したような、世界の技術情報集積と日本列島の特質を生かした生産体制を、早急実現すべきであろう。